

雪とともに暮らし、雪の上で考える。

パウダー案内人、 堀江淳の ニセコ徒然日記

リズムが生み出す ライフスタイル

起きる／腹筋する／除雪する／犬たちと走る／仕事に行く／山に登って滑る／フィットネスに行つてトレーニングする／寝る。これが、冬のニセコでの僕のルーティンだ。スキーヤーなら雪山に登る、雪山を滑る。サーファーなら沖に向かってパドルする、波を滑る。各々がそうやってリズムを刻むことで、それぞれのスタイルが育まれると僕は思う。それは生活においても然るべきで、各々の日々の生活リズム、物事の考え方、行動のバランスがスタイルに、すなわち「ライフスタイル」になるのではないかと考えている。

冬の朝は毎朝5時に起床。まず真っ暗な外を見て積雪をチェックしてから、毎日腹筋を行なって身体と頭のバランスを取る。そのあとは45分から1時間の除雪大会。夜明け前の暗いなかでの除雪は、空気が音の静けさがとても気持ち良く、身体と心のバランスには大変効果的である。それが終わったら、愛犬ハッチ（7歳／雄）、ミルク（3歳／雌）とランニング散

歩に出掛ける、犬たちにとっては1日の一大行事であり、自分にとっても癒しの時間であると同時に、雪の状態を考えたり、その日の行動を決めたりするのにとても有意義な時間になっている。僕はまずここでハザードとリスクに関して

の、自分なりの答えをある程度まとめておき、ゲストのピックアップに向かうドライブの間に移り変わる山の景色を見て、さらに頭の中で考えをめぐらせて答えをフィニッシュで漣すように絞ってゆく。そのための相棒として、愛車の三菱ジープJ24のスピード感とディーゼルエンジンの音と振動をとっても気に入っている。

最終的には、ニセコエリアの公式情報であるニセコ雪崩情報で、自分の出した結論との答え合わせ。これも欠かせない日課だ。

* オーストリアでスキーと山に携わる仕事をして、山岳スキーガイドとスキー教師資格を取得して帰国し、ニセコエリアに居を構えて10年になる。ニセコの山と雪、スキー場、静かな生活環境が気に入る、この地での生活を決断した。その後、顧客のターゲットをいわ

ゆるインバウンド層に絞ったことも、正しい選択だったと思っている。ここでもさまざまな要因のバランスが取れて自分の生活のスタイルになっている。

ニセコの魅力は上質なパウダースノーがたくさん降り、バックカントリーフィールドも豊富。スキー場からのアクセスも可能で、それぞれの目的、レベルに応じてのアプローチがしやすい。楽しみ方にもさまざまなスタイルが混在す

間と朝陽のグラデーションに浮かび上がる拙宅。2階のリビングからは羊蹄山の姿もくっきりと見える（写真右）。濃い目の壁の色と雪の白とのコントラストも美しい



堀江 淳 (ほりえ・じゅん)

オーストリア国家検定山岳スキーガイド&スキー教師 (日本山岳ガイド協会公認)。ニセコにて「Backcountry Glide」を主宰し12月から5月まで、半日～2泊3日までのさまざまなツアーを主催。本場で体感したオーストリアン・チロルスタイルのスキーを伝え続ける

Backcountry Glide

TEL.090-6994-5098 jun_skiman@bcglide.com
http://bcglide.com

DIARY OF A ORDINARY DAY IN NISEKO

ゲストとホスト。その場所を目指す人が居れば、その土地に根付いて暮らす人もいる。ニセコで居を構えて10年がすぎた、とあるスキーガイドの物語の始まり。

文◎堀江 淳 Text by Jun Horie
写真◎太田孝則 Photo by Takanori Ota

の後の午後のひとときで、ベッドに入るところには再び翌日のことに頭のながりが切り替わってくる。自分はニセコをベースに活動をしているため、3月後半までは他の地域に出る機会ほとんどない。豊富な降雪量で日々刻々と変化する雪と山の状態、状況を目で見て肌で感じていたのがその理由だ。それもひとつの自分のガイドとしてのスタイルであると思っっている。これはいまのところ変える予定はない。

また、気象条件等の自然現象からなるハザードに関してだけでなく、冬になると人口バランスの崩れるニセコエリアの自然環境をできる限り守っていくのも大切なことだと思っっている。入山する人口バランスだけでなく、ニセコエリアの開発は自分には正直カオスにしか見えない。いたるところに開発の波が押し寄せ、森林伐採と開墾が行なわれ、巨大な建物が次々と建設されてゆくありさまはまさにカオスと言える。

スキー場と人気のバックカントリーフィールドにも年々多くの人が押し寄せ、時と場所によってはこちらもカオスな状態になっている。しかし、それを嘆いてもなにも変わらない、そこで自分は他人をコントロールできなくても、自分自身の心と行動はコントロール

できると自分に言い聞かせ、心を落ち着かせ頭を働かせて行動する。そうすれば、日々ほぼノートラックの斜面と極上の雪を気持ちよく楽しむことがまだまだできるのも、ニセコのバックカントリーフィールドと自分のガイドングスタイルの魅力だと思っっている。

**ひとつのタインに現れる
パソナリティ**

自分はアルペンでも滑るが、シーズンのおよそ半分はテレマークスキーで滑る。自分にとってテレマークもアルペンも基本は同じで、ただヒールロックかヒールフリーの違いだけと考えている。タイン

多くの人を呼び寄せる 世界有数のバックカントリーリゾート。



ゴルファーがバッティングでグリーンのラインを読むように、ハイクのときは登りのラインを慎重に見極める

シールの脱着にもその人のスタイルが現れる。もちろん安全の意味でもシールの役割は大きいので、張る際もていねいに



る、世界有数のバックカントリースキーリゾートといっても過言ではないと思っっている。

そのニセコでの自分の冬の仕事はバックカントリースキーガイドである。その日のベストエリアへ行っって、安全には細心の注意を払った上で楽しく気持ちよく、さらにはかっこよく滑ってもらい、自分も楽しむ仕事。バックカントリースキーは、楽しさ、気持ち良さ、とリスクが隣り合わせのアンバランスのなか、バランスを取ること成り立っっている。そして、そこにガイドングスタイルが生まれてくる。雪が降りシーズンが始まると、思考はほぼ毎日山と雪の状況、そこに存在するであろうリスクなどに支配される。その支配から解放されるのは、一日のガイド



DIARY OF A ORDINARY DAY IN NISEKO

上) 愛犬はバーニーズのミルクとミックスのハッチ。冬でも散歩と称したランニングは欠かさない。
中) 知人から譲り受けた三菱ジープJ24。30年前から憧れ続けた車で、レストアしながら大切に乘っている。下) ツアーで大事なものはコミュニケーション。ときにはAC/DCで気持ちを上げる

ニセコの
パウダーを
滑ろう

テレマークでも意識しているのはアルペンターン。アンバランスのコントロールを楽しむ



「でもある、ベルント・グレーバーに聞いたことがある。いまから約20年前の春、オーストリア国立スキー学校サント・クリストフ校で行なわれた、オーストリア国家検定スキー教師検定コースの打ち上げパーティーのこと。

「ねえ、ベルント。ひとつの現実として自分たちもいずれは歳を取っていくだろう。そのときどうするか、どうしたいか、考えたことってあるの?」

自分のなかで迷いともいえる岐路に立たされたこの時の僕の問いに、ベルントはいつものキラキラの笑顔と大きな声で一言。「Schifahren! (スキーを滑る!!)」

の切り替えの一瞬無重力になる瞬間、アンバランスのなかでバランスが取れている瞬間が好きだ。どちらもターンの基本は全く同じで、滑りのなかでのバランスの取り方が表現されてくる。この基本的な部分がおろそかになると、スタイルではなく悪い癖になってしまい、あまりに固定観念が強すぎると個性のないつまらない滑りになってしまう。やはりここにも微妙なバランス感覚がスタイルと関連してくる。スタイルとよく言うが、それをまねたワンアクションでは決してないし、そんな薄っぺらなものではない。

ひとつのターン。そこには自分の技術や雪のキャンパスを描くシユプールへのこだわり、さらには決意、勇気、挑戦、充実感、満足感、反省、リスクマネージメント、気配りなどいろいろな思いが込められていると僕は思う。ターンはテクニカルな単独行為ではなく、自然と道具と人との調和、すなわちバランスを取ること。その人の考え方、取り組み方、生活感、人となり、生き様なども影響し、スタイルとして映し出されるものではないだろうか。

Get into the fall line!

僕の師匠であり憧れのスキーヤー

「慎重なターンで
そう言い、さっそうと
フォールラインへ。」



山のなかでもゲストとのコミュニケーションは欠かせない。スキーと会話のバランスをうまく取ることが、ツアーを成功へと導く

DIARY OF A
ORDINARY DAY

IN NISEKO

ニセコ側から稜線を越えると海との距離感が一気に縮まる。海からの距離、適度な標高・気温がニセコに良質の雪をもたらす

目から鱗、いや涙だったかな! いまになってつくづく染み入る彼のスタイル。あれから約20年経ったいま、僕も50代後半にさしかかり、まさにあのときベルントとの会話でテーマにした年齢に突入してきている。もう彼はいないが、僕はニセコの地で「元氣よく明るく [Gemma bessel Schifahren!]」と心のなかで叫びながら生きている。

*

ある初冬のピッツタール氷河でのベルントのバックカントリースでの一コマ。

「今日のコンディションからすると雪崩の危険も想定される斜面なので、慎重なターンで滑り切ることに! くれぐれも用心して!」

そう言い、彼はさっそうと飛び出した。独特のスタートをしてから身体の後ろでストックの先を2回カチカチ鳴らしてから一言「Get in to the fall line!」

えっ、慎重にって言ったじゃあん!

ベルントのあの後ろ姿は、いまでも鮮明に憧れのスタイルとして僕の心に刻み込まれている。

Down the fall line!